遊びのなかまに入れてもらえないし、悪口をいわれ、からかわれるくやしさから、ぼくは、学校がいやになり、ずる休みをしたことがありました。これを知った母は、うす明かりのいろりのそばで

「左手は不自由だけれど、右手が使えるじゃないの、足があり歩くこともできるし、一番大切な頭があり、勉強ができるじゃないの、どんなに貧しくとも、学問で負けないようにしなければ。」

と、目に涙をいっぱいためて、言われました。

自分の心の弱さに気づき、勉強だけは負けないぞとがんばりました。しかし小学校を卒業しても、上の学校には行かれません。お金がないからです。家は貧しくて借金もある。左手が不自由だ。百姓の仕事はうまくできそうもない。考えれば考えるほど、不安になってくる。この左手の指さえ動けば、この左手の指さえ動けばとかたまった指を一本一本切りはなそうと思い、小刀を取り出